琉球大学学術リポジトリ

神宮文庫本『狭衣』翻刻 (巻四(1))

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 萩野, 敦子, Hagino, Atsuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/904

神宮文庫本『狭衣』翻刻（巻四①）

萩野敦子

はじめに

本稿は、前稿「神宮文庫本『狭衣』翻刻（巻三②）」（二〇〇四年『琉球大学教育学部紀要』第六十五集）に引き続き、『狭衣物語』の一伝本たる神宮文庫本の巻四（原本では四冊目にあたる）の翻刻を、神宮文庫の許可を得て紹介するものである。紙幅の都合で今回は「巻四①」とし、当巻の約半分にあたる七〇丁までを掲載することにする。機械的に分けたので、物語場面上は中途半端になることを、あらかじめお断りしておく。また、凡例については拙稿「神宮文庫本『狭衣』翻刻（巻一）」（二〇〇三年三月『琉球大学教育学部紀要』第六十二集）を参観いただければ幸いである。なお、貴重な写本の翻刻公開をお許しくださった神宮文庫本関係者の方々に厚く御礼申しあげます。

神宮文庫本『狭衣』（巻四①）

光うする心ちこそすれてる月の雲かくれゆくほとをしらすはさるはめつらしきすくせもありて思ふ事なくてもありなん物をとくこそたつね昨日のきんのねあはれなりしかはかくもつけしらするなりとひのさうそくうるはしくしたる人のいとやむことなきさましたるかいふと見給てうちをとろき給へる殿の御こゝち夢うつゝともおほしわかれすいかなるかたさまのことゝもふと心え給す昨日のきんのねとあるに大将の御事と夢のうちにおほえ給へれはむねはやかてひしけてもものもおほえ給はすをそはれ給へる御けしきのあやしきをうへもおとろき給て（1オ）にわかに御心ちのいかにおほさるゝにかとおほしさはきたりとみに物もの給はすとはかりありてそからうして覚しのとめてしかくなんみえつるはいかなることにかとの給をきゝ給うへの御こゝちまいてよのつねならんやはつねのことゝいひなからも昨日のけしきなとは猶あやしくめとまりしをなとてよへとゝめすなりにけんときはにてれいもせさせ給ことゝものれうとてほうふくともいとあまたせさせ給とこの日ころきゝつるもかくおほしけるれうにやといまこそこゝろうれとなきいり給とのもせちに覚しつよりておき給てもいかなる山のなかにゆきかく（1ウ）れ給ひぬらんとおほしやるにさらにたちあかられ給はねととくたつねよとかもの大明神のつけ給へるに御心なくさみて御さうそくなとかたのやうにし給ひてまつほり川の院にそおはしけるかの御かたのみかとより入給にむまとも二三はかりくらおきてたゝいま人のいつへきにやと見えたり大将殿もいまそ御むまにのり給ほとなる中門より御くるまひきいれたるにをとろき給ており給へるにとのは猶おなしさまにておはしけるとおほすに中くいまそ御なみたとりあへすこほれ給てくるまよりおり給まゝにかものみやしろのかたをふしをかみ給御けし（2オ）きのあやしさもいとかくたしかなる神の御つけともしりたまはねはたゝいかなることそとおほすにとのはたゝ御なをしの袖をゝしあててなきいり給へりいてやいと心うかりける御心かなあまたあらんにてたにすこしもとりわきたる心さしのほとを見しり給てはいとかくまとはし給はてもありなん物をましていささかおもひまきらはすたくひもなくて一日かた時も見きこえぬをはこひしくかなしき物におもひきこゆるふたりのおやのとしたかく成ぬるを

みをき給てはかきりあらんいのちをたにかけとゝめてみせんとおほすへくやあらん何ことのあかす（2ウ）」うれはしき御身にもあらすさはかりいつくしうやつしかたき身をしゐてあらぬさまになして此世なからにも見きこえすわかれ申せむとおほしたらんはいかなる御心にかあらんなに事もおほろけには思ひよりたまはしとをしはかりきこゆれはいまはうしろ見きこえんにしたかひたまはさらんものゆへあなかちにもなにかせいしきこえむ只わか身はよはひすくなき身にておもひすてられきこえたらん心ひとつのかなしさをはさる物にて人のみきかんこともはつかし仏のおほさんこともつみさり所もなくかなしたゝもろともにいかにもくなしたまへさるへきにて仏のすゝめ給に（3オ）」てもあらんいかなるかたさまにてもをくれきこえてはいかてかあらんまたいみしく思しすへるやうなりとも心をみたし給はゝねかひ給はんみちのさまたけともなり侍りなんけうやうのくとくをこそよろつよりもすくれたる事に仏はの給めれ身つからはとてもかくてもをくれきこゆましけれはいかなりとも見たてまつることはたえしとおもひなくさむるをいまひとりのありさまこそのちの世にもいとかゝる心のみたれなからはおなし所にあひ給はんことはかたかるへけれなとなくくいひつゝけ給ふをつくくときゝたまふに人しれぬ心のうちをいかにしてみあらはし（3ウ）」給てけるにかとおほすにもけにこのとし比このよもかのよも露はかりおもひのこすことなく思しすてつれとたゝいまいとかゝる御心まとひをみたてまつり給ふにはいとかはかりまて思ひあくかれけん心のほとは我なからもつらくいふかひなくおほししらるゝにけにましてうへの御心のうち覚しやるはいますこし心くるしくて人やりならす袖もぬらし給ものからかくまてきゝ給てけれはいましはしはふようなりけりとおもふになをこのよもかのよもおもふ事かなふましきにやと中くたちまちに覚したゝさりつるすきぬるかたよりもいみしくくち（4オ）」おしくかなしけれとたゝ心えぬさまにもてなし給て女院の御心ちへちのこともおはしまさすとうけたまはりしかは年ころもねんころにあひかたらひ侍そうのひえのさかもとのへむにわつらふことありてまうてたんなるとふらい侍らんとてけさそいてたち侍をもしいかなるかたにきゝたかへさせ給へるにかなに事によりてかさしもたちまちにさまてはおもひ給へらんとつれなくきこえ給もいと心うくつらくて袖もえひきはなち給はぬをかつはいてやむけにのちの世もかへりみすつたなき心のほとを仏も見給らんかし浄蔵浄眼のわうへんゆきやうし給ひ（4ウ）」けるを見給ひてこそ妙庄厳王もこゝろきよきおこなひをつとめて花徳菩薩ともなり給けれまことにかゝるつゐてにわれやなりなましかはかりおもひたち給ひけれはつゐにさまたけきこえしなと覚しなりぬれとれいならぬ御かりさうそくにやつしていかにそやおもひみたれてよりゐたまへる御さまのほのかなるほしの光にゆゝしきまて見え給をよものあらしにたくへこけのころもにやつしきこえては皆成仏のきはにも心きよからすやとうちまもりきこえ給ふもけに劫濁乱時諸仏の方便もありけるかなと返々かひなくもはつ（5オ）」かしうもおほししられけり夜あけぬれとうちもやすみたまはすなをおほしむせひたる御けしきのいとこゝろくるしう見え給へはおもひかけぬさまをのみ返々きこえなくさめてさりけなくもてなし給へとも御心のうちはいとゝみたれまさりてむねもつとふたかり給へりあかくなりぬれはとのはうへの御もとへいてたち給ひけるさまなとこまかにかきてたてまつり給へり御らんしてもいかてかはかみの御心をゝろかにはおもひきこえさせ給はん院の御前はかりにはこの御ゆめこまかにかたりきこえさせ給けりかう殿にいらせ（5ウ）」給ひていよくかゝる御心をおもひなをさせ給へときこえさせ給さはかくおほしてやきんのねもれゐならすてをしみたまはさりけんけにさもなり給なましかはいかにあさましからましとそおほしけるとのには覚しかけさりつる御よなかありきよりはしめれいならぬ御けしきなる

を心えすいかなる御ことにかと人々は思うへなともわたらせ給ひてやかてその日よりかもにてはしめさせ給御いのりともまいらせ給へき日なとさためさせ給さまなとなに事のいかなりけるそと世の人もきゝおとろくはかりにこちたしおほかたもおほしいたらぬことなきなかにとり（6オ）」きて覚したのませ給へるさるへき御ちそうともなとにはことのありさまなとしのひての給はせてあくかるゝ御心をしつかになし給へとなく〳〵のたまはすれはけにいとあさましき御こゝろときゝおとろきつゝ心をつくしてをのをのいのりきこえてもかつは又さるへきにてこそはかはかりめてたき御身なからさしも世を覚しはなるらめほとけはいかに御らんすらんなとあはれにたうとくそおほえけるそのゝちはいとゝひるまのほともうしろめたくめはなちにくゝおもひきこえさせ給てたゝいましはしをまち給へあなかしこをくらかし給なとのみ（6ウ）」の給ひつゝとりあへすなみたをのみこほし給へはいと心くるしくてまた世の人のきゝつたふらんこともかへりては中〳〵心あさく物くるをしかりぬへけれは思ひかけさりしさまをのみ返々うへなとにもきこえさせ給ていかにして物おもはぬさまを見えたてまつらんとよろつもてなし給へはけに中〳〵すきぬるかたよりはうはへはかりははれ〳〵しくなり給へれと心のうちのくるしさをさらにえ思しなをされすくるしきまて心ひとつにはおもひあまり給なくさめには入道の宮にそのちの世にさへすてられたてまつるへきすくせにやとあさ（7オ）」ましくほいなき心のうちなとすこしもらし給て

いそけともゆきもやられぬうきしまをいかてかあまのこきはなれけんいひしにたかひたる心のほとをいとゝいかてかはとはつかしきまてなんとかきつくし給へるをれゐのほのみたまひて

いかはかり思ひこかれしあまならてこのうきしまを誰かはなれんと覚しつゝくれとはかなかりし御てならひも見しやうにきこえさせ給てしのちはうしろめたうて御心ひとつにそこめてやませ給ける一品の宮へまいり（7ウ）」給はぬことをたれもゆるしなくきこえさせ給ひしかともこのゝちはさやうのことをくるしく覚しけるにやと心えさせ給へはかけてもきこえいてたまはすめをのみかけてうしろめたけにのみきこえさせ給もあからめしにくゝくるしけれともさのみこもりゐたまはんもまことにをときゝくるしかるへけれは一品のみやはかりにはまいり給てまきらはしき御ありきなとはし給はす心のとかにてものし給へともなに事も世のなかのことかくれなくてかやうにおほしたちけるをとのの御ゆめにきこえ給ひてまもりきこえ給なとくはしからねとを（8オ）」のつからもりきこえてことしもまことにそきやつし給たるらんやうにおしみあたらしかりきこゆれはみやもきかせ給ていかてかは心うく覚しめさゝらん思すちことなりける人をおとゝなとのあなかちにいひてかはかりもあらするに思ひわひてさまてもおもひ立けるにやなといとゝはつかしう見えにくゝおほさるれはまれ〳〵おはしたるにもわたらせ給ふこといとまれなるをとやかくやとなつかしうきこえあきらむへきかたなけれはたゝ心えす見しらぬやうにてすくし給にあまりうちしきるよるのひとりねはいとめもあはす覚しつゝけらるゝことおほかるなか（8ウ）」にもあしせんのまちとをに思ひおこすらんそいとかなしさに枕もうくはかりになりにけり

この比はこけのむしろをかたしきていわほのまくらふしよからましなとやすけにもなくそおほしあかしひるはつれなしつくり給にこよなくなくさみてよる〳〵そかくてのみはなからへあかさんことありかたくおほされける大将殿かもにまいり給ふへき日ちかくなりぬれはその御心まうけいとこちたしかゝれはまい人にえらはれたるわかきんたち心ことに思ひいそきたり大しやう殿はいかなりしことゝもしり給はぬにうへありし御ゆめかたりくはしくかたり（9オ）」きこえ給てつきせすうらめしと思ひきこえさせ給けりけにさしもたしかに御らんしけるよときゝ給にあ

やしくしつめかたき心のうちのなめけさをおほしとかめすしゐて世になからへよとをきて給ひける神の御心のありかたく思ひしられ給て猶ひたみちにすてかたかりける身のほとかなとは覚ししらるへしかもにまいり給日のことくわしからすともをしはかるへしいついかなりし御願ともはたし給にかとみやしろの神人ともはめをおとろかすに神もいとゝ御心よせことにまもりはくゝみきこえ給て夢の中にやつけしらせ給けんゆく末の御よろこ（9ウ）」ひもたかへ給はすかならすかなへさせ給へと申あけたるこはつかひいとたのもしくめてたけれと大将殿の御こゝろのうちには

神もなをもとの心をかへりみよこの世とのみはおもはさりけんひくらしおもしろうめてたきことゝもまねひつくすへうもあらすかやうにひまなくまもりきこえ給さますきぬるかたにたちまさりたり宮にまいりそめ給てはこのとのゝおはし所もわさとなきさまにもてなしきこえ給てとまり給はぬよなくをいさめ申給ひしかともいまはいにしへのやうにこまかにみかきたてゝ女の御かしつきのやうに（10オ）」あけくれ只此ことをかしつきつゝいかなるわさをしてよを覚しあくかるゝ御心をやめんすこしも御心とまらん人をきゝつけてもてかしつきてみせたてまつらはやかきりあれはなをにくからぬ人にみつき給てこそおほしとまるやうもあらめかゝる心さしを見給なからも我らをは露はかりのほたしにも思ひたまはさりけりとたゝふた所してこの御ことをとやかくやといひなけき給へる御さまともいとゝをしうくるしけなりかゝることをさかのゐんにもきかせ給ひていみしくうらみなけかせ給ときゝ給ひてされはよといゝきゝにくきことさへいてき（10ウ）」ぬるよとむつかしくおほさるゝものからなけかせ給めるさまもかたしけなくあはれなれはとのに御いとまきこえ給てわか宮くしたてまつりてまいり給へれは御らんするたひことにめつらしきさまにのみねひまさり給へはうちまほらせ給にもいかなる心にてなにことにつけてもかはかりありかたき身をさしもいとはしくおもふらんとおしうあたらしうまほらせ給にまつ御なみたもこほれさせ給ぬいはけなくものせられしよりおとゝのおもふらんにもをさくをとらす思ひそめてしに今となりては又いとゝさまくのほたしともをさへゆつり侍しかは所せきよはひのほ（11オ）」ほとをもゆつらんとこそおもふをいとほいなくいとひすてらるゝさまにきくもいとたうときことにはあれと又うらめしきかたにはすゝみてなとの給はするにもけにいとかたしけなけれはいかなるひかことともをきかせ給にかとさいふくとまり侍らはしたなきほとにやならんとすこしうちわらひ給へるあい行そこほれたるわかみやの御ありさまみたてまつりすてゝはかきりあらんみちにもいかてかなと申給おほやけわたくしの御ものかたりれゐのこまやかにて日もくれぬれはいて給まゝに入道の宮の御かたにまいり給へりみやは御念すたうにおはしけれは（11ウ）」やかてそのみすのまへにちかくさふらひ給中なこんさふらひけれは御ありきもいとゝありかたふうけたまはるに思ひかけぬほとにいかてときこゆれはなとてかつねよりもありかたふも侍らん又いたゝのはしやいかにとかやいひてみすをすこしひきあけ給へれは宮もおくふかういらせ給ぬありつる人々もみなすへりいりぬるにみきちやうをもをしやり給はてみやり給へは御きやうはこもあきたりちくもとまてあまたまきよせられて御すゝはけうそくにうちかけられたるしきみのかうのていはなやかにさまくのうつしかともにいとゝもてはやされてなつかしきにもあり（12オ）」し世のてあたりはまつおもひいてられ給てたゝいまもさしむかひみたてまつるわさもかなとゆかしきにれゐのなみたこほれぬ物もの給はてつくくとみわたし給へるまみなとしへぬることゝも覚したらすつきせすものあはれと覚したり年ころはよろつにおもひたちなからも思ふことひとつにせかれつゝすくしゝをありし夜ののちはいとゝすゝむる心ちしてひとへに思ひなりにしかとうきは

かきりもまことにあるましきにやとけふまてもおなしさまにてみえたてまつるこそはつかしけれとてなき給へはいてやいと心うき御心にこそ侍りけれ若宮をおもひきこ（12ウ）」えさせ給はゝさりともさまてのことは世におほしよらしとこそ思ひ給へしか行末はをのつからかかるかたさまにつけてもえさりかたくたのみきこえさせ給へるさまにも侍るへかめる物をいとゝおもはすにいと心うしとこそは人しれぬ御心にも思ひきこえさせ給らめときこゆれはいてやかひなきかたさまをはさるものにてたゝさはかりをたに御らんしとめられ給へりとたにおもはましかはなとてかはたちまちにかくまては思ひより侍らましいときゝにくゝいひさはかるなることもいかにほいなうきかせ給はんとおもふのみこそよろつにすくれてくちをしく侍れかゝるかた（13オ）」さまにてさへ御心にたかふすくせよとつきせぬ御なみたなりうすにひなる御あふきのうちをかれたるもめとまり給てせちにをよひてとりよせ給へれはなつかしきうつりかはかりはむかしにかはらぬ心ちするにみところあるゑなともなくさまかはりたるはなをいとあかすかなしうおほされけり

てになれしあふきはそれと見えなからなみたにくもる色そことなるとかたかんなにかきつけてもとのやうにをき給ぬまこと院の女御は五せちのほとはほり川の院にいて給にきかし斎院のおはしましゝかたにそおはしける大（13ウ）」殿のもてなしかしつききこえ給さまをさかの院にはいかてかをろかにおもひきこえさせ給はんまいておもふさまにしいて給へらはといつかたにも御いのりとも心をつくさせ給へり行すゑはしらすたゝいまはいとめやすくとりはしめ給へる御ありさまを見給につけても入道の宮をかくしなしたてまつりけんことを大将殿は心くるしくもつらきかたにもこゝろにはなれぬまゝにおなし御ゆかりにてあつかひきこえ給さまかたしけなし斎院は女御とのゝ御はゝ宮いまはのきはまてあはれなりし御せうそこも思ひわすれかたくおもひいてきこえさせ給へはわか宮をか（14オ）」きりなくおもひきこえさせ給へはおさなき御心ちにもとりわきまつはしたてまつり給へれとかきりあれはいまは御あたりちかくもまいり給はぬをくちおしうおほしたりこの女御もかくうと〳〵しからぬ御中になりまいらせ給をうれしく思して御ふみなともとき〳〵かよはさせ給けり御てなとのなへてならぬにつけてもいかならん世にへたてなくみたてまつらんとむかしのともにはかたみによそなからもおもひきこえさせ給けりやよひのついたちころ斎院の御前のさくらいみしうさかりなるをつれ〳〵なるひるつかた御くしあけのまにゐさりいてさせ給てみいたさせ給へれは空の色もあさみとりにて（14ウ）」うら〳〵とのとかなる野へのかすみはみかきのもとまてつゝむめれともこほるはかりのにほひえもいはすめてたきに西のたいのまへのさくらのもとなるさかき葉あをやかにて色もてはやされたるなともほかの木たちにはにす御らんしわたさるゝにつけてもあけ暮御らんしなれし古郷のやへさくらはいかならんとおほしやらるゝ一枝をたにいまはみるましきそかしとはなのうへはかりはくちおしき御こゝろのうちなり

ひとへつゝにほひおこせよやへさくらこちふくかせのたよりすくさすなとおほしめすもまちとをなれは女御とのにきこえさせ給（15オ）」

ときしらぬさかきの枝におりかへてよそにも花を思ひやるかなさてやかていとあをきさかきの枝につけさせ給へりおほしやるもしるくとのゝさくらはみねつゝきもかくやと思えてちるもさかりなるもさま〳〵めてたきを女御はなやましき御心のなくさめにもなかめいてさせ給ほとにこのかはらぬ色はめつらしくおほされてすきにしかたそいとゝ恋しくおほしいてられける

さか木葉になをおりかへよさくら花またそのかみのわか身とおもはんなへてならぬ枝にさしかへてそたてまつらせ給ける大殿うちよりいてさせ給まゝにまつこなたにまいり給てちかき（15ウ）」御木丁のもとにて

うへのおほつかなからせ給ことなときこえさせ給にありつるさかきの御まへなるを見給てそのかみの心ちし侍枝さしは覚しいつること侍りけるにやときこえさせ給へは斎院よりたゝいま侍りつるにこそなとの給はするさてはいかやうにかはけましきこえ給へるにかとてゆかしけにおほしたれはありつる御ふみをさしいて給へり見給まゝにあなをかしの御てやとうちゑまれてうち返しくみ給けしきおほろけならんははつかしけなるをめてたしと覚したるさまそなのめならぬけに思ひかけさりし御すまひともそかしあまたのなかに（16オ）」このちかきやへ桜はおさなくよりとりわき給てはなのさかりにはしつ心なけに覚しあつかふめりしかはいかにゆかしく覚しいつらんなに事も世中はかりおもひのほかなる物侍らさりけりまいてこれより年つもりぬる人いかなることを見侍ぬらんなにことをもみる人なくてすき給なんはかへりてくちをしきさまのしたまへりしかは思ひたつこと侍りしをかくひきたかへしめのほかになり給よしも是こそあるへきことゝ思ひ給へなから猶しはしはほいなき心ちし侍きかしされと昨日けふ思ひ給れはいとかたしけなくうれしかりける御すくせなり女はたかきもみし（16ウ）」かきもたゝ一すちによりてそ心よりほかに人にもとかれさるましき心のほとをも見えしられ侍かしわか心と身をほたす心なけれとをのつからそれにしたかひてあらする人もなくなりぬれは身を心ともせぬやうにてはてくは思ひなけきあつかふへかめるにいのちのかきりはとかくみたるゝ御心なくていつとなく心のとかにすくし給つへかめれと世に侍らすなりなんのちもあなかちにうしろめたきことも侍らさりけりたゝ仏の御かたさまをそむき給へるのみそのちの世のためくちおしきことに侍るかしそれも又女の御身は斎宮斎院にさたまり（17オ）」給はすとも三千大千せかいをてらす玉の行ゑしらては仏になり給はんことかたくこそ侍らめさるは卅二相もいとよくそなはり給て仏の御ようゑくはへ給へきさまにそ見え給へるなとの給ほとに大将殿もまいり給へりこの御ふみをみせたてまつり給てたゝいまこの御てはかりかく人たれかあるそ式部卿宮のうへこそなたかく物せらるれともしやうのこまかにうつくしけなることはえまさられしなかたへはみなしかとよいかゝとてさしやり給をいまはしめてめつらしきにはあらねとさはかりなにこともたくひなき物に思ひしめ給める御めにはさま（17ウ）」ことにのみ覚え給へはうちもをかれすまほられ給ふいまもむかしもかはかりなるはかたくや侍らんとはかりの給へと我ものにみてやみぬるすくせのくちおしさよとなみたさへおちぬへけれは返しまいらせ給つ女御はわか身の行末こゝろほそくのみおほさるゝにはとのゝの給ことのみみゝとまり給てこの御有さまをうらやましくおほされけりこの花はたてまつらせ給つらんやいかやうにてかとゆかしかり申給へとかはらぬ色のあはれのみ心にかゝりてはなの色はいかゝきこえやしつらんとしとけなけにいひまきらはしたまへる御けはひをかしきをむ（18オ）」かしの御心さしかはらぬ御こゝろにてなまゆかしきかたさまもうちましりたる御中にそあるへき大将殿はすくれたる枝をおらせ給て斎院にもてまいり給へり御前にはきんの御ことひかせ給なるへし御木丁よりことのつまはかりさしいてゝさくらもえきのみへの御そともくれなゐのうちたるふたへおりものにはさくらのこうちきなとそかさなりたる御袖はかりそみゆるちかくより給て女御殿にゆかしけにきこえさせ給へはとてまいらせ給をうちとけことをみたまへるにやと中くしらすみぬ人よりもはつかしくおほしめさるれは御かほいとあかくなり（18ウ）」なから御あふきをさしやりて花をいれさせ給に心をくれたるさまにあふきして御木丁のかたひらをすこしあけ給へれはうちみあはせ給へるまみのいふかたなくうつくしけにけたかくはつかしけにあい行こほれさせ給へるをつねにみたてまつりしおりよりもかくわさともむかはせ給はねはにや過にしかたよりもゆゝしきまて見えさせたまへはとみに花もをかれすつくくとまもられてなみたのこほ

れぬへきを人々のみれはまきらはしにありつる女御殿の御返の御すゝりのうへなるをとりてまきらはし給へといとかくけちかき心のう（19オ）」ちはなをまきれかたしもしやうなとわさと上手めかしとなけれとすみつきふてのなかれなとあやしくなへてならすなまめかしくあてやかにかきなし給へり入道の宮のあくまてうつくしうらうたけなるものからさうすめかしきもしやうなとのこよなくまさり給へる物をとおもひいてられ給ふなにこともこれはこよなくをとり給へりときゝしたにいとめてたきさまにて御さひはひもめやすかりける物をとある心くるしとまつわか御あやまちのおほしられてくちおしき心のうちはなにことにもすくれ給へり斎宮の御て（19ウ）」なといつれかすくれ侍らんえこそ見わき侍らねと申給へはいつれもとりくにをかしけにこそはみゆめれとの給はするあちきなくあはれとひとりこたれてみないとめてたかりける御ありさまにこそはそのなかにも入道の宮をは院のとりわきて思ひきこえさせ給へりし物をそれしもこの世ははかなきさまになり給へるこそあはれなれのちの世はしもすくれ給へるめり心はさきたちなからさきの世のつとめからにやすかやかにえ思ひたゝさなるみちをなにはかりふかうしもおほしとらさりけん物をまきれなくをこなひ（20オ）」給へるさまこそうらやましけに侍めれ山かへるとかやいときゝにくき名さへとゝめ侍りぬるよさてもいかなりし御夢そとたにまたえこそうけ給はらね人こそものゝ心しることはかたう侍れなかきりなしとかやいさむるみちのつとめはいかてか神は御らんししらぬやう侍らんつゐには思ふことかなふへき身そと御らんしたるとかやくらゐにやつかんとまてこそみなおほしあはせ給へるめれをのつから見きく人あらはいかにをこかましきためしにもならせ給はんとあはれにこそさても心のうちにはおもふことなくしも侍らし物をまことに神の御心よせことな（20ウ）」らはことさまにてそすこしその夢をたのむ心も侍へきとて涙はうきなからうちゑまれたまひぬ

はかなしや夢のわたりのうきはしをたのむこゝろのたえもはてぬようき木にあはむよりもかたきことかなとしのひてきこえ給へとひきいりてふさせ給ぬれははしたなくてたちいて給へるにひんかしのすみのまにはなみるとて人々あまたゐたる所により給て君たちさえあまりつゝしみ給ていまはめもみいれ給はねはいみしうつれくにこそなりにけれとの給へは新少将とておとなしき人ものにもかなとこそ（21オ）」おもひたるけしきともに侍れはまいてなにかはみいれまいらする人も侍らんときこゆれは心うのことやものおそろしからてきゝすくしてすゑのなからへくやしくこそ思ひいてらるれなとたれとなくいひたはふれ給て

みかきもる野への霞のひまなくておらてすきうき花さくらかなわさとなくいひすさみたまへは新少将の君

花さくら野への霞のひまくにおらては人のすくるものかはさまてはなてういさめる侍らんときこゆれはうちわらひ給てひとりしもおほしとかむるこそうれしけれ東のたいに（21ウ）」こそむかしさることありけれとの給へはあふにしかへはまいてさはかりの身はなにかおしく侍らんこの世のめんほくにこそとさはやかにたはふれきこゆるをわかき人々はあひなうあせあらてそきゝけるさきのこゑくあまたきこゆれはたれならむとおほすにこの物いひさかなかりし大なこんはこの院の別当そかしそのおとゝのこん中なこん宮の少将なといひしもいまはさいしやう中将といふそかしそれならぬわかき人たちまりもたせてまいりたるなりけり花のためになさけなき心ちすれとなにとなく心ゆきて見所あることなりとの給ていつらなとの給へは色々のす（22オ）」かたともぬきゝこほしてありもとしたゝめつゝあまたうちつれてあゆみいてたるみすのうちよりわさとなく所くより色々みえたる袖くちともれいのことなれと内わたりのこのもしき御かたくよりもこよなく心にくゝゆへくしく見えわたされたれは心ことなるよういともにて花の下にてまかふすかたともい

つれとなくをかしきなかにさいしやうの中将を大将のしゐてすゝめ給へはわかくしきわさかなとはすまへとけに人よりはことにをかしきさまにてかすもこよなうあるをけうし給てやゝもおりたちぬへき心ちこそすれなとていましはしわかうて（22ウ）」あらさりけんとの給へはみすのうちの人々まめ人の大将はおりたゝすや侍りけんさらはしも花のちるもおしからしとくちくいみしくたてたてまつらまほしけなりそのいたうくんしたるなさしよそへつへかなれとこよなうみくらへ給はんもねたけれはとうちゑみ給へるあひ行はなのにほひよりもこよなうまされりはなのいたうちりかゝるをみ給てかうふりたまかへりてあとなからふかしとしのひやかにくちすさひ給てかうらんにをしかゝり給へるまみけしき御こゑなとはかのさくらはよきてとてはなのしたにやすらひ給しさまをそのおりをかしとみし（23オ）」かとこの御ありさまにまたたくひなくのみそなにのおりにも見えける日暮てみなのほりぬるにいつしかゆふつく夜さしいてゝ木すゑともいとゝおもしろく見えわたされたりさまくのことゝもみすのうちよりいたさせ給へはとりくゆつり給つゝ大将はてもふれ給はねは大なこんあるましきことなりとてきんをせめたてまつり給へとこの御前にてはさらにめつらしけなく中くに侍りなとの給てたゝあふきうちならし給てさくら人うたひ給おもしろさにまさることなかりけりをかしきほとあそひて人々まかて給にをりものゝほそなかこうちきなとやうの物とも給はせけり（23ウ）」大将もいて給ふおなし十よ日に一品の宮にれいの物すさましくてなかめそふし給へるに日ころかたらひ給ことある人こよひなんさりぬへきとやきこえつらんさらはいかゝはせんかくのみ物むつかしき心ちやすこしなくさみぬへきといてたち給そなたさまにやらせ給うすくかすみにくもりたる月かけさやかにもあらぬいとゝもの心ほそけなる空のけしきをみちすからなかめつゝも思ひたちしほいはやかてたかひぬへきにやかのあきらかなりし御ひかりはさりともたのもしかりしをなとかゝるよしなきありきもかすつもるはあるましきことそかしと覚しいつれは（24オ）」物すさましうなりてひきかへす心ちし給へはしはしをしとゝめさせ給へるについひちところくくつれて花の木すゑともおもしろうみいれらるゝ所ありいかなる人のすみかそととはせ給へはみちすゑまいりて故式部卿宮に侍りさいしやうの中将もこゝにこそおはすれと申せはすこし御心とまりてちかうやりよせてみ給へは門ともはさしてけりかせにしたかひてやなきのいとおきふしみたるゝに花の木すゑもみるまゝにのこりすくなくなるはみすてかたふおほすにひわしやうのことなとひきあはせてあそふなるなりさまもゆかしきわた（24ウ）」りなれはおり給てくつれよりやおらいりてことのこゑするかたにたちより給へりしん殿のみなみおもてのはしかくしのまを一まはかりあけて人はあるへしちかきすいかいのつらによりてきゝ給へはひはたゝこのみすのもとにてひくなりさうのことはおくのかたにそきこゆるこれやひめ君ならんとみゝとゝめ給へるに入道の宮の御ことをたくひなきものに思ふにこれはいますこしあい行つきおもしろきことはすくれてやとまてきこゆるに心とまりぬれと心とけてもひかてやみぬるはあかす中くなるにゆかしうなりぬれとすこし物のけし（25オ）」きみゆへきやうもなけれはいて給ににしおもてにいとおさなきこゑにてくしやくをむろ《うろむろイ》ほうにすんするこゑのうつくしうきこゆれはさいしやうのおとうとほうしになるへしときゝしなるへしとおほすかうしのひまより火のかけすこしみゆるを猶もあかすよりてのそき給へは木丁ともをしやられなとしておくまてみとをされたる丁のまへにけうそくにをしかゝりてきやうよむ人卅よはかりにやとみえていみしうけたかくあい行つきみまほしきさまなりこゝらみる人のなかにならふへくもなししろききぬともにうすいろなといとあさやかにはあらぬをきてかほなとつく（25ウ）」ろひたりとはみえぬにかみのかゝり色あひなとまことしうをかしけなる

をさはこれやひめきみならんとおほすへけれとさすかにきくとしのほとにはいふへくもあらすもてなしなともおとなしうやすらかにてこの物すんするちこの七八はかりなるをきやうよみさしていとうつくしと思ひてうちゑみ給へるけしきなとも中将のはゝにやとみゆるにあまりわかうをかしきをあやしと思給ふわか御はゝ宮をこそたくひなくめてたしと思きこえさせつるにさはかゝる人も世にあるにこそとおほすにもこれにゝ給ていますこしわかうきひはならんひめ君の御ありさま（26オ）」は我思事もかなふへきにやとうれしさはさるものにてこの見る人をみさしてたちいつへきにもあらすおほゆるにいとかたくなしき心のありくてつくにやわかとしのほとよりもおとなしきさいしやうの中将のありさまをなとおもひあはせ給にそいとにけなくあるましきことのさまかなとひとりゑみもしぬへし

おりみはやくち木のさくらゆきすりにあかぬにほひはさかりなりやとひとりこちていて給にわれなからもものくるをしくおほししらる心さし給へる所はちしの大なこんたゝひとり（26ウ）」かしつき給御女かきりなくをかしけにて斎院になんすこしにたてまつり給へるとうへの御かたにさふらふそちの君といふ人のかたりきこえさするをきゝ給てさるたよりありてしたしくかよへはみせよとせめわたり給をおやたちしらてはさすかにありかたきにこよひはさりぬへくやありつらんあないきこえさせたるなりけり中やとりに心とまりていとと物うくおほさるれとたゝこともとゝ申せはなをまことかやとみあらはさまほしきかたもあれはえすきやり給はすつたへ人のもとにせうそこいはせ給へはたゝいらせ給へとあれは人のな（27オ）」きかたより丁のうしろにみちひき入て火なと心もとなきほとにあらすしなしたるにをかしけなりともいひつへけれとかけても思よせたてまつるへきかたなかりけれはいとすさましうていて給ひにけりよもすからかのくち木の花はおもはすにそ覚しいてられてかくよつかぬ心のうちをもむけにしらせぬはくちをしけれはなくさめかたくてれいのひめ君の御かたにきこえ給やうなれとことさまのこゝろもそひたるなるへし

ちりまかふ花に心をそへしよりひとかたならぬ物をこそおもへかやうにきこえ給おりし（27ウ）」もさいしやうの中将まいり給へりさまくおはなつましきゆかりなつかしうてつねよりもこまやかにかたらひ給つゐてにもことのねきゝしさまはほのめかさまほしけれと思ひかけぬありきしけりとはおもはれしいまよりのちもさるへきひまあらはみさためてをまことしうおもひさためんとおほせはいひもいて給はす中将のかほのいときよけなるはほかけにすこしおほえたるなりけりと思ひいてられてうちまもり給ふもいかてしらんさてもきこゆることはきゝ給はてやみぬへきかむすひとゝむとかや有しひとことにいまゝてなからふをおなしく（28オ）」はなとかたすけはてたまはぬまつこのせんしかき心やましくはらたゝしとよ人のゆるさぬあたりに身のほとしらぬ文のおちゝるはおこかましく思しかとも身のうへになりてはさりとてえ思ひすつましきわさなりけりとていとつらしと覚したるけしきまことしう思しなりにけるにやとみゆるには人しれすうれしけれと心ひとつにはえまかせ侍らねはは丶に侍るひとにはつねにかやうにものし侍りあさましうふるめかしきありさまをなに事につけてか覚しかすまふはかりはあらんさる物から心つからの物思ひはいかはかりくやしく我心にもつらきかたに思（28ウ）」ひなしきこえて人もあひなくやとつゝましけにものし侍るをあなかちにすゝめ侍らんといさやれいの御心のわつらはしけれはこそせんしかきは思せられぬさきにもいみしういなみ侍れとみつからはいとつゝましきことに思てさらにきゝ侍らぬにおい人はをこなひにいとまなしとてたゝやかてきこえさせよとのみゆつられ侍そやいまよりはさらにくときこえてまめやかには女ここそ人のもち侍ましきものなれおやのこゝろをみた

ることもいとことはりに侍りやこみやのかくれ給しおりにやかてかたちをかへてみやこのほかのすみかにといてたちて侍るをおさなくものせし（29オ）」おりかゝるかたちの人をいみしくおちてかくときゝてのちはたちはなれすなきくらして侍しかはえそむきやり侍らす又いつくもおなしさひしさといひなからひきくしては山のあなたのいゑゐにも心くるしきさまをひきこめてはいかゝなとおもひかへしつゝすくし侍りて又春宮にこ宮のけいしをき給しこともある猶さやうならむたにのした水になさてをと中宮よりの給はするをうしろみなきましらひは思ひたちかたかるへきよしを申なからも又けにさのみいひてもさのみいかゝなとやうにたゝこのひとりのありさまをあけくれのなけきにてすかくと此よをも（29ウ）」えそむき侍らぬにこそいかにもくみさためてはやかてこもりなんと思ひをきたる所も侍めりさりとてもまいてかたのことくなるありさまに見をきても心やすくふとみはなつはかりのことはいとかたかりぬへけれは猶なかきよのほたしにこそ侍めれおとこそやすくはへれつかさくらゐなといふことはめやすきありさまならねとたゝおほやけにすてさせ給はぬをかしきことにはをのつからすこし侍りぬへかりけり世中にすてられなは出家をしても此世をこそおもひ出なからめ仏にならんことを思へは心やすく侍りかしをんなの思かしつく人なくてあるましきありさまをみ（30オ）」侍らんもいかはかりかはやすからすもおほえ侍へきとてはては涙くみたるけしき心ことにおもひをきてたるいもうとの君と見えたり東宮になとゝ覚しをきてんをはかけてたにかくきこえさせんはいとひんなきことにこそ侍りけれさはありともそのおほしたつらんみやこのほかのかたさまなとにはさる御ましらひをみはなちきこへてはありかたくこそ侍らめかくま心なるうしろみまうけ給はてはそのかたはまきれなきさまにはものし給なむとこそは思侍れかの御ためめやすしとこそおほさゝらめたゝさるかたに心やすくうしろやすきかたにはなとてかと思ひ侍れと又おほし（30ウ）」うたかふらんのちのくやしさなとはいさや心をはかる物ならねはわれなからしりかたく侍れと人をも身をもかへりみぬあたくしさなとはならはぬことなれはなとかさしもあらんとこそはおもひ侍れひかくしきまてよを思ひすてゝきゝにくきまてたれにもくもてさはかれたてまつるありさまなとはきゝ給らんなまれくかく心に入てきこえそめてんことをなこりなき心のほとなと見えたてまつることにいかてかあらん見ゆつるかたなく心くるしからん御ありさまみそめたてまつりてはいのちもおしうこそなとこまやかにかたらひきこえ給へはいてやまいて宮へ（31オ）」まいり給はんことはおもひかけす侍めりあまり心やすけにの給はする御心もかすならさらん人はまいていかゝはなといみしうつゝましうそ侍るやなと東宮の御ためをろかならぬさまにいひいつるそあちきなきやみちしはの露は袖にかけ給はぬ日もなかめる物をまことありつる御かへりもてまいりたるを中将みてさりやかくのみひまなからんにはいかゝとわつらはしかるもをかしけれはひきそはめてみたまへは

ちる花にさのみ心をとゝめては春よりのちをいかゝたのまんとあるはよへのほかけのなるへしつゝましけにきえなとはせてひとくたりにひき（31ウ）」わたされたるふてのなかれもしやうなとこれを上手とはいふへきそかしとみえていとめてたしなにことも世にすくれたりける人のふりにけるこそくちおしかりけれとみ給ふ中将ほのみてすかさせ給ふにこそありけれいとふるめかしきせんしかきは又むつからせ給ぬへかめりといふもいとしたりかほなり四月ついたちころに院の女御いたうもなやみ給はてひめ宮うみたてまつりたまへりおなしくはなとかとさかの院にはいとくちおしくきかせ給へと内にはいかにもくまたならはせ給はぬ事なれは御はかしやなにやとあつかはせ給もたゝいとめつらしううれしきことにそおほしたる御（32オ）」ゆとのゝきしきありさま御うふやしなひ

こゝぬかまてめてたさなとおもひやるへしよろつの事大殿大将殿なともてはやしきこえ給ありさまなのめならねはおもふさまならぬことゝも見えすめてたき御すくせとのみゆうちにはいと心もとなくゆかしくおほしめしつゝとくくとのみの給はすれは御いかのほとにまいり給ぬいつしかとめつらし人見たてまつらせ給にめなれたらん人のめにたにかゝるたくひはありかたくやとみゆる御うつくしさなれはまいて時のまもめはなちきこえ給へうもおほしめされす御ひさのうへにて日くらしまもりきこえ給ほとにらうかはしき（32ウ）」こととともをさへもてあつかはせ給める御けしきかたしけなくめてたきにましておもふさまにてものし給はましかはと女御は猶あかすくちおしくおほされけりもとよりたにとりわきたりし御おほえなりしかはたゝこの御かたにのみおはしますをこと御かたくはやすからぬことにおほすへしいまゝて后のゐ給はさりつるを女一宮の御めつらしさにいまはたれかはおほしきしろはんとてつゐに院の女御ゐ給ぬうちつゝき春日の神もいかゝおほさむと世の人はなやめとそれによるへきならねはやかてほり川の院にいてさせ給ぬ御しつらひありさまもひきかへてみやつかさなともさまくにな（33オ）」りなとしてめてたき御ありさまよのつねの事なれとめにちかくみる事には猶女こをかやうにてみさらんはいけるかひなくもあるへきかなとそおほえける東宮の御はゝ宮をは皇后宮ときこえさす七月相撲のころそいまの中宮きしきことにてうちにまいり給ける春宮には御けんふくのおりまいり給へりし右大しんの御むすめれいけいてんひとりそさふらひ給けるもこよなうをとなひ給て御あそひかたきにあらすやおほすらん大将殿のいまよりほのめききこえさせ給ひめ君の御ことを御心もいれ給へれといとまちとをなるにきかせ給へはいと心もとな（33ウ）」くおほされけりしきふきやうの宮のひめきみを故宮かならす御らんせさせんと申をき給しをゝとなひさせ給まゝにおほしわすれすなから御こゝろひとつにはえおとろかさせ給はさりしにはゝみやもちこかほのなへてならすうつくしかりしをいかゝおひなり給らんとの給はせいてゝそゝのかさせ給て御ふみなとはたひくかよはさせ給なりけりかの宮にもかゝる御ふみなとをことのほかにもてたかへて（注1）はつかしと覚したるけしきにてなかくふみともえとりかくさせ給はぬにむらさきのかみのなへてならぬにむすひめいとたゝいまとみゆるをゆかしかり申給へはえおしませ給はて（34オ）」式ふ卿のみやにきこえよと大宮のゝ給しかはせんしかをしへつるまゝにかきてやりつるとて給はせたりせんしいかにはかくしきことををしへ申つらんとわらひてみたまへは

のとかにもたのまさらなん庭たつみかけみゆへくもあらぬなかめをとかや所くほのかなるすみつきさたかならねとはゝ君のにいとよく覚えたれとおもひなしにやいますこしわかやかにらうたけなるすちさへそひてこれをいままてみさりけることゝくちおしくてうちをきかたくおほさるゝことかきりなしまたいとおさなけなる御てなとも中くに心やすきかたにてこと（34ウ）」はりそかしとおほすものからかはかりみところおほかりける物をいまゝてみせ給はさりけるそうらめしきこれはいとをかしけにもさふらふ物かなむすめのてほんにとらせまほしう侍れとあはくしきやうに侍るへしとてまいらせ給つかくなにこともめてたき人を御らんしそめてはあやしのむすめやおほしをとさんと思給るこそいとからく侍へけれとけいし給へは御かほうちあかめてこれはまいらせんともなかめるをとてなまくるしと覚したるをあなおさなの御さまやとをかしくみたてまつり給御すゝりかみなと申給てひきそはめてかき給はやかてこの宮人なるへし（35オ）」

いつまてもしらぬなかめの庭たつみうたかたあはてわれそけぬへきことはりしらぬをなくさめわひてなん

くちをしやをたえのはしはふみゝねと雲ゐにかよふあとそひまなき

なとかき給をいつくへそたまへみんとの給はすれとうちさくりてひきはひなとはせさせ給はすいまよりいとけたかううるはしき御心なるにそへてこの殿をはうちとけかたふはつかしきものにおもひきこえさせ給へるなりけり世のなかいとすけなうてありにくゝのみ思給へらるれはいかゝはせんとてなま女のあはれにしつへきかたらひ侍そと（35ウ）」けいし給へはいみしうわらはせ給かくまいり給おり〈はさるへき文ともとりいてさせ給つゝかへしともしとけなくならはしきこえたる所々なをし給ふ心えすおほすもしともなとこまかにいひしらせたてまつりなとし給へはけふもあまたのふみともなとゝりちらし給ておもしろくうちすむしつゝならはしきこえ給にくら人まいりてけしきたつはありつる御返事にやとおほしてたち給へるにそれなりけれはかくれのかたにてひろけ給へるを物いひさかなきこん大なこんふとさしのそき給へれはひきかくし給へるをれいのめさとさはみてけりいてやいまへかゝれはそかしと（36オ）」うめきかくるをこれはあやめ給へきにもあらすむすめのひとつかきなれはちらさしとてとの給をけにさならんかし

水あさみかくれもはてぬにほとりのしたにかよひしあともみしかはものいひのうしろやすさはおほしいつることもあらん物をたゝやはみせさせ給はぬとむつれよりてせちにさかすをさていひいたしてわひしきめはたかみするそといはまほし

とりあつめ又もなき名をたつるかなうしろのをかにかりせしや君たゝすの神にもうれへたてまつらまほしかりし物かなとてこれはれい（36ウ）」のせんしかきとみ給へはこま〈とやりてさしやりたまへるをねたかりはらたつさまもひとへにくからすあい行つきたる人なりにはたつみ見給てのちはいとゝほかさまにきゝなし給はんことはくちおしきをむつましき御なかにて皇后宮まことしくの給はせはいとゝ思ひつゝむかたおほからんわかかたさまには世に思ひならしとおほすそくちおしかりけるいかやうにかおほしたると御けしきもゆかしくて大宮の御かたにまいり給てものかたりなときこえ給つゐてにみやのいとおとなしき御心のつかせ給て式部卿宮にきこえかはし給事なとけいし給へは故宮（37オ）」はたゝこの御ことをのみ返々の給しかとよそなからはその御心さしのしるしもなきをおなしくはさやうにてもなときこゆれとかのはゝ君いかにも〈たゝうしろやすからん人におやさまにあつけわれはあとたえたらんすみかにこもりゐなんとの給なれはけにおほかたならんましらひにはいかてかなときくをこのふる人とものたくひなかりしちこさまのいかにおひなりてかとかたりきこえさせたれはわかき御心ちにゆかしう覚したるにこそあめれけにこそさはかりのちこは世にあらしとおもひいてらるれいかてたゝむかへとりてしかなとの給はするさま思はすならん（37ウ）」かたになしたらんは人きゝもひんなくこの御心ともにもいかゝおほさんといとをしかりぬへけれとかくのみなのめならぬありさまをむかしよりきゝそめてつゐにみすなりなんは猶いとほいなかるへけれはかくねんころに覚したることゝみてのちはえ覚したゝすおほさるれとたしかにいかてみてまことに思ふならはつみにはあたるともいかゝはせんなとおほしけりふみはわさとの御つかひなとはきしろひかほにひんなけれはたゝさいしやうの中将のもとへひまなくせめやらせ給つゝそのなかにそいれ給ひける東宮より御つかいありと見をきていて給まゝにれいのこまや（38オ）」かにうらみつゝけ給中に

くらへみよあさまの山のけふりにもたれか思ひのこかれまさるとさりともたくひあらしと思給ふるをけふはかりはとりかへてもなとかとあるおほんかきさまはしもけにたくひなけなるをきこえかはし給つらんもにけなかるましけれとさしはなちかたき御かへりをまつとすゝめつゝかゝせたてまつらせ給に又はいかゝはさま〈にきこえ給はんとてれいのうへそきこえ給

あさましやあさまの山のけふりには立ならふへきおもひとはみすとそありけるさい将のきみは猶さはあれいたつらになしきこえつる（38ウ）そとおほしなしてかくまことしくの給おりにゆるしきこえ給てよ春宮にはこのとのゝ御むすめとて一品の宮におひいて給ひめ君のいまより心ことに思ひきこえ給なれはいま二三年すきなはまいり給なんとすなりそれにはいみしくともきしろひきこえ給てんやさやうの御ましらひはあらぬまてもかみなき位にやゐ給はんのたのみをかけてこそうち〳〵のくるしさはなくさめてもまちたまはめそのかたおもひかくましきにてはなに事のかしこかるへきそ又なへてならんなまかんたちめのはしはすきまなきにてもくちおしかるへき御さまにこそ侍め（39オ）れこの殿は一品宮おはするにてもいとめてたしまいてうち〳〵の御心さしをみるになとかはとこそは見え侍れよそのおもひやり人のおもひきこえたるほとよりはなこりなき物わすれなとし給へくもあらぬ御心をものさはかしうかよふ所おほくまきれ給かた〳〵かた時なくこゝかしこさためなくなとおはせさめり時々にてもうちかよひ給はん心のとかにうちたのみきこえてこのよのおもひ出にてなとか女の御身はなからんとこそみゆる御さまなれなとの給ふけにともおほすそのなつゝかたよりはゝうへなやましけにしたまふをれいもあつさにはさのみこそとみたてまつ（39ウ）る人もみつからもおほしとかめぬにうらめつらしきかせのけしき待つけ給てしもくるしかりまさりて物心ほそくおほさるゝまゝにたゝひめ君の御ことをおほさるゝよりほかのことなしさるへきさまにみたてまつりをかてわれさへたちまちになくなりてはいかにし給はんすらんさいしやうもわか身ひとつたに人にまかせられ給へりいみしう思ひきこえ給ともいかゝはしたまはんとおほしつゝくるかいとかなしけれは一日にてもわかみる世にや大将にゆるしきこえましある人々の心もうしろめたきにと思して人しれすさやうなる御心まうけし給へるを大将（40オ）はえしり給はて御心ちのことゝもとふらひきこえ給て

一かたになりなはさてもあるへきをなと二みちにおもひなやますとあれとくるしうし給ほとにて御かへりなし日にそへていとゝよはくなりまさり給へとたゝこの御ことをかたのやうにも見をかんとまきらはしのひ給てこと〳〵しからねとをかしきさまにおほしをきつれと猶えまちつけ給ましきにやかきりのさまに見え給へはあまになり給ぬいとわかうをかしけなる御ありさまをさふふ人々もさはかりの御身をやつし給はんあかすかなしきにひめきみはや（40ウ）かてわかれのことまてもおほしたとらぬにやかなしさもたくひなけにおほしまとひてなきしつみ給をみ給ふにまいてあとかたもなくみなし給てんのちの御ありさまを覚しやらるゝにいとみすてかたきこゝちし給大将かくときゝ給にもやつしかたかりしかたちをおほしいてられてかはらぬさまを又みすなりぬることゝくちをしう覚え給けりさいしやうの君のもとにあはれなる御とふらひねんころにきこえ給てれいの御ふみもあれはとりくしてうへの御かたにおはしたりいむことのしるしにやけふはすこしものおほえ給さまなれはかくなとみせ（41オ）たてまつり給けにあくまてなさけ〳〵しかりぬへき御心さまなりけるをくちをしくみたてまつりをかすなりなんことをよみけなからの給いま一の御ふみには

我のみそうきをもしらてすくしつる思ふ人たにそむきける世にとそありけるかくつねにの給をきこえてあるも物思ひしらぬやうにおほすらんかしとてひめ君の御かたはらにおなしさまにてふし給へるをこの御かへりきこえ給へうしろやすくみをきたてまつりてのちにかたちをもかへかきりのいのちをもたえはてんとのみこそおもひつれとかなはぬわさなりけれはつゐ（41ウ）にみたてまつりをくこともなくてやみぬへきをおもはすなるさまにて人にもあは〳〵しき心のほとをきかれ給はんよりは侍らすなりぬともこの人の御もてなしにしたかひ給へとそ思ひ侍れはか

くみるおりくにうとくしからぬさまにもきこえならひ給へかしとおもふなりと御くしをかきやりつゝいひしらせきこえ給にいとゝなみたのみなかれいてゝおきもあかり給はねとすゝりなととりよせ給てかしらもたけ給つゝなをなときこえ給へはなくくおきあかり給へるかみのかゝりつらつきなとたゝよそ人にてたに見そめてはかきりのみちのわかれもえゆ（42才）」きやるましきさまのし給へるをましていかはかりかうしろめたくかなしくおほされさらん

うき物と今そしりぬるかきりあれはおもひなからもそむきける世をなとかたのやうにていたし給へれとまちみ給へる所はめつらしきにやいとゝみてはやむましくおほされけりたち返きこえ給へれとけさはすこしよろしかりつる御心ちかきりにやと見え給へはきこえさせしやまてらへたゝいまわたし侍とさい相のきこえ給へりかめ山のふもと慈心寺といふわたりにこそこ宮のたうなとたて給てともすれはこもりつゝをこなひ給ひしをうせ給てのちも年に二（42ウ）」たひのひかんのおりはわたり給へるふたんの念仏もしてきえはてんとおほしてわたり給へるなりけりくすはひかゝるまかきのけしきもひさしうみたまはさりつるほとにいとゝさひしさまさりにけるをいとゝかれはてなんころほひいかやうになかめすくし給はんとみすなりなん世のことのみ心にかゝり給てうしろめたくおほさるゝをいかてかくしもおもはしさりともいたつらにはなり給はしと見ゆる御ありさまを我身のゆきまとはんみちのほたしはいといみしかるへきをなとしゐておもひなくさめつゝやかて四十九日はしめ給て日々にたうとくあはれなる事をきゝ給になと（43才）」て年ころもかやうにてつみをすこしもかろめさりけんとくやしくおほさるくるしきをせちにねんしつゝをこなひ給へと露よりもさきにやと見えてさらにきえいりつゝたのみすくなくのみなりまさり給大将殿は日をへて有かたくのみとふらひ給をうれしきことにおほしたりみつからもしのひてわたり給へりさいしやうもあからさまに京にいて給ひにけりはつかよひなれは月さへをそくいつるころにてことゝふへきかきねもおほつかなけれはこゝかしこたゝすみ給てみめくり給におほきなるたうともあまたありて三まいつとめをこなふけしきたうとけにてそうはう（43ウ）」ともあまたつゝきなとはせてこゝかしこたけのはやしはかりこくらうしなしつゝなかきよのすみかとおもひかほなるもめとまり給てあはれにうらやましうおほさるやまよりわつかにおちくる水ををのくわつかにたけのひとよをくもてにまかせやりつゝまちうけたるさまこほりのくさひかためたらんころほひはいかゝと心ほそけなりゐ給ところとみゆるはてらよりはすこしのきてそありけるをひにせるほそたに川のをともさやかになかれておなしきいはのたゝすまゐも心あるけしきにしなして時おりふしの花もみちの色ともゝかすをつくしたると見えてみ（44才）」ところおほかりされとあさちかもとことにたちぬる人なかりけるとみえて心ほそきに色をつくしてみたれあひたる草せんさいともに露のしら玉所えてむしのねもほかよりはみゝのいとまなかりけりのきをあらそふやへむくらに人こそみえね秋のけしきはしれぬへかりけりいなはのかせもみゝちかくはきゝならひ給はぬいなおほせ鳥のをとなふもさまくにさまかはりて物心ほそけなりされはこゝには人ありけもなくて九体の阿弥陀すへたる御たうにやかておはするなりけりたうのかさりなともこくらく思ひやられてたうとかりけるをなとていまゝてみさり（44ウ）」つらんとくちをし僧房ともにこほうしはらのものすんしなとするこゑくはかりきこえてれいならすわつらふ人のあたりとも見えすしつかに心ほそけなりせんほうあみた経のこゑはかりそきこゆる人のこゑするかたによりてみちすゑかくときこえさすれはおとろき給てやかてふし給へるもやのみすのまへにしとねうちしきて入たてまつり給へり月はなけれとほしの光さやかなるにのきちかうたとくしきほとにもあらねはおほかたの御やうたいうちふるまひ給へるあ

りさまなとのあなめてたと見え給へるにかせにしたかひてくゆりいてたるにほひ（45オ）」はけにこそなへての人にはに給はさりけれとよそに思やりきこえつるほとよりもいますこしめてたくはつかしけなるをみ給ふにはたはふれにもおほけなく思ひよりけるかなとみ給ものから又かゝらん人をこそはとしのわたりにもまちつけてみるへかりけれありつる世になとてちかくしうみたてまつらすなりにけんとくるしき御心ちもむねさはきまさりてせちにかしらもたけてみやり給とし比もいかてと思ひなからをのつからさはる事かちにていまゝてになり侍ぬるも心のうちよりはをろかにやと心ときめきに月もまたす（45ウ）」いそき侍つれとさいしやうもものし給はさりけれはあさましくたとくしく思ひ給へられつるみちのそらかなとの給こゑけはひもめにちかうかきりなきものに思ひきこえ給さいしやうなとにゝるへくもおはせさりけるかなたれしていかゝはきこゆへきと心ちもいとゝかきみたるれと人つてにてはかたしけなかりぬへけれはせちにためらひより給てたひくとはせ給をたにもをろかならす思ひ侍るにわさとたつねいらせ給へるにこそけふまてなからへ侍りけるもうれしうとの給もいとよはけなるしもみしおもかけにかはらす（46オ）」わかうをかしけなるをいとかゝらさりけるほとをなとてきかすなりつらんとくやしきにつゐむなしくなりたまひなんとおしかりぬへかりし人さまなれはうちつけにあはれもあさからすそおほさるへきへにける年のつもりにはこれをはしめに思ひ給へらるへきにも侍らねとありくてかくたのもしけなき御けはひをしもうけたまはるをこそすきにしかたのくちおしううらめしさも身つからのあやまちかほに思ひ給へらるれとてうちなき給へるけはひなとふしまろひなきまとはんよりもあさからぬ御心のほとゝみるも（46ウ）」かはかりの御心のほとゝしらましかはとうしろめたくかなしうおほえ給人の御ことはまつしのひかたうてあるはあるともおもはすなからもいとかう昨日今日とはおもはてすくし侍りけるくやしさをさまくに思給なかにも露はかりみゆつるかたなき人のうしろめたさにゆきもやられ侍らぬをかゝるとをちのさとをもたつねさせ給へかりけりとみをき侍ぬるこそすこしたのもしうさるはおなしけふりにそたくひなまほしけにおもひこかれ侍ぬれはいかにともつゝけやらすなき給にやときこゆるけはひむけにたのもし（47オ）」けなきはたゝきく人たにかなしきをいかはかりと思やるそいと心くるしかりけるかたくにいとことはりなる御ことはきこえさせむかたゝにこそ侍らさりけれさのみおほしいるらむをみたてまつらせ給へはいと心くるしうも覚しめさるゝにこそ猶おほしなくさむへうこそ人々もきこえさせ給はめなとおとなしくすくよかにきこえなひ給へと

われもまたますたの池のうきぬなは一すちにやはくるしかりけるといひけち給けはひなをきゝしらん人にきかせまほしきをさまことなる御心のうちをはいかてかはしりたまはん（47ウ）」

たえぬへき心ちのみするうきぬなはますたの池もかひなかりけりとにやたえくにていと心ほそけなるはみをきかたけれとなかゐせんもむつかしくやとおほせはいまよりはうとくしからぬ心ちし侍ぬへけれは又もなとの給ていて給にやかてこのつゝきてたてたるわた殿に人のけはひするにたちとまりてきゝ給へはいつらいまは御とのあふらまいれなとそいふなるほかけにみしちこのこゑにてまらうといて給ぬいまはわたらせ給へひめ君の御まへこそといふまゝにかのたち給へるつまとをしあけていりぬるにいとうれしくてやをらいり（48オ）」てみ給へは仏の御まへの御あかしのひかりほのかにてはかくしうものも見えぬにいまそちひさきわらはゆへ（注2）ともしてもてきたることにしつらひもなくて木丁はかりあるをひきよせてふし給へるやひめ君ならんとみゆるに又人二人はかりそゐたるとみゆるほとにこのあきたるとよりかせのあらくしくふきたるに火のきえぬれはしそくもてまいれなといふこのわたとのは

人々うちやすむ所にてあるにしらぬ人のかくおはしたるにしはしよりふし給へるなるへし人いて給ぬときゝ給へはわたり給なんとてやをらをきあかりてちこ君をともにて（48ウ）」さうしよりこなたさまにゐさりいて給にひきとゝめ給へれは思かけてうちみかへり給へるにほしの光にえほうしのふと見えたるに心まとひしてやかてうつふしてをともし給はぬをちこ君はとく〳〵といひわひてさしよりて見給におとこのゐたれはこれもおとろきたるさまにてたちかへりいりぬれはさうしもひきたてゝいますこしちかうひきよせ給へるにものおほしいりてあるかなきかのけしきはいきもたえぬにやとみゆるを仏におちたてまつるかたは人よりまさりて侍れはなめけなるさまにはよも侍らし心やすくおほせたゝかはかりのうとましさは（49オ）」うへの御心よせもことのほかには侍らねはさしもなにかはなときこえ給ほとにちこ君のつけらるにやをとなしき人のけはひにてこのさうしをひきあけてこはたかものし給や仏の御まへとはしり給はぬかいとあやしきわさかなとてさくりよれはうちわらひ給て仏のみちひき給へれはこそかくおもひのまゝにおもむき侍ぬれとてさうしくちのたゝみにかりそめによりふし給へりけりこの殿におはしけりと思ふにむねはおちゐぬれとおりあしう御心ちもいかにとわひしけれととかくきこゆへきにもあらねはひとゝころの御ことを見たてま（49ウ）」つりなけかせ給ほとにおなしさまにのみしつませ給てさらになにこともきゝわかせ給へうもおはしまさゝめるをとなけくけしきこの御めのとにやとそおほゆるたゝかはかりにて侍には御心をなにかくるしうおほされんかへらんにいたうふけぬれは月まつほとかくて侍らんにひとりはおそろしかりつれはとの給へはさらはこなたにこそいらせ給はめあまりなめけにこそ侍れといへはさうしよりこなたに君をいれたてまつり給にたうとく水の心ちし給てあせのこちたくなかれ給へるけはひはたつきなとのけにきゝしにたかはすよにたくひなき（50オ）」ものに思しめきこえ給へる御ありさまにをとり給ましかりけると思ひあはせられ給にいとゝのこりゆかしうわりなしとしころなとてのとかにおもひてすくしつらんあなかちにおもひいれましかはなとことのほかにしも人の思給はましすきにしかたゝにゆかしきにこよひのうちにこのほとけの御まへをいていつへきにもあらすかた時のほとたにおほつかなく思たてまつり給はんありさまかたみに心くるしかるへしいかにもこの心ちすくしてこそはなと心のとかに思ひしつめてたゝきしかた行末の心のうちなとをなつかしうきこえしらせ（50ウ）」給に御心はのとまり給つゝとりあへすこほれ給へるなみたもせきとゝめつれと時のまもたちはなれたてまつらすみたてまつり給にあなかちなるさまにてこそゆなとも見いれ給にいかゝものし給はんかゝる事なんいかにあさましうきゝ給はんなと思やらるゝよりほかに露はかりみゝとまることそなかりけるあり明の月もいてにけれはかうしのひまより所々もりいりたるいとゝ心つくしなるにかうしのもとのかきりをはなちてをしやり給へれはのこりなうさしいりたるを女君いとゝわひしうてひきかつき給へるをとかくひきあらはしつゝ（51オ）」み給へは斎院になんにたまへるときゝしは玉のをのひめ君のやうなるかはねのなかにてもかの御さまにすこしもおほえたる玉の光たにかよはゝそてにつゝみてもみまほしう思しねかひつるにかくをときゝものむつかしからぬあたりにすこしのなくさめ所のありけるもたゝあなかちなる心のうちをあはれとみ給ひてかゝるかたちを神のつくりいて給へるにやと覚しよるもあちきなく涙そこほるゝ

なけきわひねぬ夜の空ににたるかな心つくしのあり明の月ときこえ給へといらへ（51ウ）」きこえ給はぬそくちおしかりけるいかにかはかりまてみたてまつりそめてすくせなといふなるものゝことさまになり給はゝいかゝすへきさてもやなを世になからへんとすらんあすのふちせもうしろめたくおほさるゝまゝにあらましことをうち返〳〵きこえ給ほと

にまことにあけゆくけしきなれは御ともの人々もとかくたちやすらひつゝをとなふめれはいまよりのちのおほつかなさのなかくわりなかりぬへきをいかゝすへきたゝかはかりのほとはいつもかたうしもあらしをへたておほくもてなし給はんこそほいなく心うかるへけれはさらはきりのまよひのたとく（52オ）」しきほとにもろともにもこそとおもひはへれいかにもくときこえさせ給へはまことにさもやとおほすかあさましうわひしけれはまいてなにことかいはれ給はんあなおほつかなのわさやかはかりのみにやほりの宮にやとてうちわらひ給へるけはひいときかまほしうめてたきをいつか思ふさまにてみたてまつらんこの御心ちすこしよろしくたにならせ給へかしなとちかうふしたる御めのとなといひあはするにあふきをすこしうちならし給へはまいりたるによのほと御こゝちはいかゝ夜もすからねむしあかし侍つるしるしはさりともこよなう侍つらんかしとの（52ウ）」たまへは御心ちはおなしさまに侍りそこのおましところのみくるしさをこそ心くるしかりあかさせ給へれときこゆれは人々のあしうきこえなし給へるにやとものくるをしう思ひやりなきさまにきかせ給らんこそはつかしけれとの給ひてよのほともうしろめたけなりし御けはひのくるしさにさいしやうの御かはりにとてこのみすのまへにてあかし侍りつるにみねのあらしもはけしくてみたり心ちなやましけれはそなたへもえまいらていそきまかてつるときこえ給へいまよりは入たうもまめにつとめ侍へけれはむりやうこうをへてもねかひかなひ侍りなんとた（53オ）」のもしきをわたくしの御心よせもよういし給へなとなつかしくかたらひ給へるけはひまことによそに見なしたてまつらんは口おしかりぬへかりけりうへはよへもきゝ給しかとなにかはいとかくうしろめたくあはれなる御ありさまをすこしもけちかうみそめ給てはさりともあはれと心とゝめ給はさらんやは心より外にあはくしきさまにてやなと覚しうたかふへき所ならねはなとはおほしなから此月ころあけくれねをのみなきしつみていみしけにやせそこなはれてうちとけ給へるをほとなきのきの月かけもいかならんすこしもなのめならんこ（53ウ）」とはいみしうはつかしけなる御ありさまにとおほしあつかいつるにかゝる御せうそこもちかをとりし給はぬにやとむねうちさはきてうれしうおほさるゝそあはれなるや夜中はいたくふけ侍りにしをあらくしきかせにつけても御みちのほともうしろめたく思ひやりきこえさせしにとまらせ給にけるもしらすれいよりもまとろみ侍りにけるもけに御いのりのしるしにやといまよりはさらは草の枕も心しぬへうこそはときこえ給へるを

とけてねぬまろかまろねのくさまくら一夜はかりも露けき物をほのかにはあらぬなら（54オ）」はしもとすこしほゝゑみ給へるけしきにてわさと御返とはなふての給をひとりきくはあかすやおほえけんまいりてまねひきこゆれは

草枕一夜はかりのまろねにて露のかことをかけんとやおもふとそきこえ給へるまかきのきりいとゝひまなくて月かけもなかくくもらはしくなりぬれはいとゝたちいてかたうおほさるゝにみちすゑ御くつもちてまいりてきりはれ侍らは京のうちはみくるしくや御くるまゐてまいれとやおほせつかはすへきと申せはくはやいたうなにくみそとてたち出給まゝに（54ウ）」

くすのはふまかきのきりも立こめて心もゆかぬみちの空かなとやすらひ給へと露いとしけき中をさしぬきけしきはかりひきあけてあゆみいて給を人々のそきてみたてまつりてめてまとふことはりなり殿におはしつきておもかけ山はけにまめやかにこひしうおもひいてられたまへはむつましきさまになりてこのまゝの心ちせは思はなるゝかひなくすてかたうもあるへきよかなと覚しつゝくるにもとのうへなとの我をはほたしにも思たらす心につく人いてきなはかゝる心はやみなんとつねにの給はするをあるましきことゝのみきゝつれとけにさも（55オ）」ありぬへかりけ

りとそおほししらるゝやいてやみたらし川のかけにならひぬへしとみえはこそさまてのほたしにもならめいとさしもなうはいかゝあるへからん又かのみしにもにたるとありしやりほくは思いつることにむねのくるしきを思まゝになりてきかれたてまつらんこそ猶々つらう心うかりぬへけれ返々もいひしにかはる心はへをさへ又〳〵みえたてまつるへきにやと思ひつゝけ給にはいかさまにして我身をかのおなしさまになしてたにきかれたてまつらんとひきかへされ給けりされとも又さてやむへくもおほされねはやかてねられ給はてつとめてもいとゝう（55ウ）」御こゝちのおほつかなさなときこえ給てさてもけさはれゐならぬ心ちにまとひ侍りて

おもかけは身をそはなれぬうちとけてねぬ夜の夢はみるとなけれとなとやうにきこえ給へりける御つかひ返まいりてたゝいまなんうせ給ぬるものさはかしう侍りぬれは御返もまいらせてときこゆるをいとあへなくあさましともよのつねなりけりわつらひてはほとへぬれと露のかことをあはめ給へるもたゝいまのことそかしと世のはかなさもいとゝおほしらるもろき涙はかことかましうもりいてぬいとたちまちにと思ひいそく一かたにしもあらすこのほとは（56オ）」あまたたひゆきかへるへきみちとおほしつるをいみのほとなとはふとしもかよはしかしとおほすもまことにいとゝ心もとなくわりなしはかなかりし花のたよりのほかけよりはしめ夜へのけはひのあはれなりしなと覚し出らるゝにさらによそのことゝも思え給はすあかすあはれにて中将のもとにこまやかにとふらひ給さまをろかならす御返にはいまはかひなきことはさる物にてをくるへうも侍らぬ人の御ありさまにみ給へわひぬるとあるを見給にもかゝる中のかなしさはいつれもをろかなるへきにもあらぬなかにもおなしけふりにもとの給しけしきもなへての（56ウ）」中とは見えさりしをけにいかに思らんとおほしやらるむけにおほつかなからましかはいとさしもおほさゝらましをほのかなりしてあたりけはひくまなかりし月かけなともすこしもなくさめよと神仏のまとはし給にやとおほえしはもの思ひの枝さしそふへかりけるすくせにやとこれをさへかひなくきゝなしていかなる心ちせんと此比はこと〳〵なく覚え給けり

こえもせぬせきのこなたにまよひしやあふさか山のかきりなるへきと覚しつゝくるもいととゆゆしくいかてかさりとも神仏世におはせはさるめはみせ給はんとねんせられ給てれい（57オ）」のむつましうおほしたのむ御いのりのしともにかたらひつゝいのりなとせさせ給へりのちの御事なとさいしやうのひとりあつかひ給をしのひたれと山をくりの人々もいとあまたたてまつりたまひなとそのほとの御あつかひをおほしいたらぬことなうこまやかにとふらひきこえ給をさいしやうはまことにありかたう思ひしられ給日かすつもるにあり明の月かけはみたらし川にならひぬへく見えしか思ひいてられ給てしのひありきもことにしたまはすよるのころもを返しわひ給よな〳〵さすかにあやしうおほさるれは

かたしきにかさねぬころもうちかへしおもへは（57ウ）」なにをこふるこゝろそなときこえ給へとさらに日をまつさまにてなときゝ給へはおほしわひてちか〳〵しうなりては此ころならは思事はたかひやせんとわれなからうくおほししらる山てらには日ころすくるまゝにおなしさまにてとのみきゝ給へはいみのほともえまちつけすわたり給へりさいしやうの君たいめんし給へるにあはれなることゝもつきせすかたりてかゝる中といひなからもよのつねならさりける心さしのほとなとをかたりて露はかりはか〳〵しうかひあるさまをたにみえてをくれ侍りぬることゝいひつゝけてなへてのさまならす侍りつるならはしのなこりはことは（58オ）」りにみ給へなからゆゝしきことゝもをうちつゝき見侍らんことゝいひていとしのひかたけにおもひたり今はのとちめにしもまいりてあはれなりし御けはひをきゝ侍しかはそのおほすらんにもことにをとるましき心ちし侍りてなんいとはしう思給へし身もいまはいかてなからへてなと

おもひ給へしあらましことも見えたてまつらてやみぬるこそいみしうほいなけれなき御かけにもかひなきものにはみえたてまつらしと思侍るをいとたのもしけなうのみきいたてまつるにこそ猶世にもえいかに侍るましきにやと心ほそうなとうちなき給へるけしきのあさからぬをうれしと思あな（58ウ）」かちにわかくしきまてならひ侍りしなこりのうつし心なきまておもひまとひて侍めるさらになからふへくも侍らさめれははかくしからぬ身一しもかはらぬさまにてなにゝかはし侍らんなと思給へなりてなんとていたう思なけきたるをみ給ふにいとゝうしろめたくゆゝしけれとまいてみつからなとの給へくもなかなれはたちわつらひてそかへり給三条わたりにいとひろくおもしろき所をこの御れうとて大殿えもいはすつくりみかゝせ給へるをいてやなにゝかはせんと心にもいれ給はさりつるをあり明の月かけすませ給はんにかひありぬへくみなし給てしの（59オ）」ちわか御心さしそひてなへてならぬさまにとおほしよる物から猶いますこしみはてゝこそうきはたくひなかりけると見えられたてまつらめと猶いみしうはつかしともかなしともひとかたならす心のうちもおほしさためさりけり皇后宮なとのきかせ給はんことのいとをしさそくるしうおほさるれとさりとていまはゆつりきこえさせん事はあるましけれは又けふまてもこのよにあらんとは思はさりしをかくてもあられけりとあらはいかゝはせんとおほさるなるへし四十九日すきなはわたし給はんことをおほすに女院御ものゝけたちていとをもうわつらひ給へは行（59ウ）」幸なとありておほかたの世の人たに心のいとまなきほとなれはまいて大将殿はあからさまにもえいて給はぬまゝに山さとのおほつかなさをいかにくとしつ心なふおもひやり給て

うかりける我中山のちきりかなこえすはなにゝあひみそめけんあまりにおほつかなきも心うくむかしの御ことを覚しいてはかうやはもてない給ふへきとうらみきこえ給へるをさいしやうもけにあまりものおほしるましき御ほとにもあらすかはかりありかたき御心をあなかちにうとくしうもてなしたてまつらんもいとおしうなときこえ給へとよろつとりまかなひ（60オ）」てきこえしらせ給ひしさまのみおもかけにおほえてひとくたりもひきつゝくへき心ちもし給はねはひきかつきてなきふし給へりたれもくきこえわつらひぬかくいふくもなこりとまれる日かすのほとは日々にあらはれ給経仏をかたみにしたてまつりなくさめ給をそのほとも過ぬれは御しつらひなともれいさまにあきらかにしなしたるにつけてもいまはいとゝかなしさのかすそふ心ちし給ていとゝあやうきまてなりまさり給をさいしやうはこれによそへてもかなしう思ひ給へりせちに恋しう思え給夕くれにもしもやなくさ（60ウ）」むとわたくしに御心さしことにつくりをきゝこえ給てつねにむかひゐてをこなひ給ひし十たひの仏たちみたてまつり給にも薬師にはわかことをなん申すとの給しをおほしいつるにいわうほうやくのくすりもいまはなにゝすへきにあらぬをいまはたゝおはしにけんかたにたにをくり給へかしさはかりのことはかたくしもあらしをくわうみやうふせんとかやの給へるちかひそかなひかたかめるとおほしつゝく

夢さめしあかつきかたをまちしまにななぬかにもやゝ過にけりとかそへらるゝ日（61オ）」かすあさましくてくろき御そてしてをさへ給へるさまくろきにもてはやされてかしらつきかみのかゝりなとも゛にかゝまほしうをかしけなりかゝるほとに大将殿は三条にわたし給はん日なとさため給ていまはたゝやかてむかへきこえんとおほすに女院つゐにうせ給ぬれはたゝこもり給ぬるもいとくちおしうおほさるかうのみ思日かすのすきつゝたかふやうにのみあるはつゐにいかなるへきにかとおほすもしつ心なううしろめたきまゝに御ふみはかりは日に二たひ三たひもうちしきりきこえ給へと御返そ露なかりけるさいしやうにもほひなうてすくるくか（61ウ）」すを心もとなかり給てこの御いみのほとすくしてむかへ

きこえんなとの給へはけになにかはいまはまかせたてまつりてこそは心みめなとおほしてまつけふあすれゐの所にわたし侍りてありさまにしたかひてこそはさやうにもなとそきこえ給けるひめ君はひとりふるさとにたち返給はんことも物うく猶しはしなこりの所をたにおきふさまほしくおほせと中将は此春つかたよりあせちの大なこんの御あたりにかよひ給てめつらしきさまの心ちになやましけにし給をかくたえこもりてすくし給へるおほつかなさもいつしかとおほせと今さへかくしつ心な（62オ）」くかよひ給はんもいつかたも心くるしかるへけれは大なこんとのゝ君をもおなし所にてのとかにみんと思給なりけりとしのはてになりてそわたり給けるひめ君は御しつらひありしなからなるにひとりたち返給へる心ちのかなしさはよのつねならんやはあけくれむかいきこえ給へりしおもかけはかりは身にそひたるやうなれとおきふしにつけても物おそろしう心ほそき心ちのみし給てさらになからふましうおほしたるをさいしやうもいとことはりに心くるしけれと女君またわたり給はねはよるなとともり給ことはかたけなりつねにはえおはせ（62ウ）」す心ほそきもことはりなるにひころふる雪のとしのゝこりなうなるまゝにいとゝしくふりつもりてきえやるへくもあらすしみわたりたるをみわたし給て

ことはりの年のくれとはおもへともつもるにきえぬ雪もありけりなとやうにはかなきことのはのみむかしのかたみにはおほしなくさみけり日のくるゝまゝにかせのをともいとあさましくてよこさまにふきいれらるゝあられのをとものおそろしくなりぬれはかうしともいそきまいりて女とちさしつとひて心ほそく思にひめ君はまいてたゝひとりの御かけに（63オ）」こそ雨かせのをともふせき給ひしかいひしらす心ほそく覚したれはことはりにてさいしやうの君を人々うらめしく思きこゆ大将かくわたり給けるとはきゝ給へと日ついてなとえり給てこそはとおほしていまゝておはせさりけるを院の御いみもはてゝよろしき日なりけれはいとしのひてかせのまきれにわたり給へりとかうたちやすらひ給へと山さとのすみかにことにかはることもなく人めもまれにてとかむる人もなし雪はかりあるしけにふりつみたる庭のおもはるくとして心ほそけなるを見わたし給にわかき人のはるゝかたなく（63ウ）」てなかめ給らん心のうちいかならんとあはれにをしはかられ給みたうのあつかりたちたるそうのおほみあかしのきえたるともしつくとてわつかにいてきたるをよひよせ給てさいしやうはおはせぬかととひ給へは昨日のひるいて給しまゝにみえさせ給はす大なこん殿のひめ君なやませ給とてまれになんこのとのへはおはしますと申せは弁の君といふ人にたいめんせんといふ人なんあると物せよとのたまへはひめ君の御めのとのおとゝにこそおはすなれとてたちぬるまゝにいてつるつまとによりてみ給へはかけさりけれはこゝにもねんすたうしを（64オ）」かれてをこないつとめける人のあとゝみゆそれよりやかて火の光のみゆるかたさまにすくくとおはすれとことさらになよくとしなし給へる御そなれは心あはたゝしきかせのまきれにていとゝきゝつくる人もなしもやのなかよりとをりて丁のそはなる屏風よりのそき給へはこなたくらにていとよくみゆ火をつくくとなかめてそひふし給へるふとみつけたるにたゝそれかとまて思いてられさせ給みたらし川のおもかけさへたちそひて心さわきするにやかてかたはらにもたちいてまほしけれとおとくといひつる人にや北おもてのかたよりきてかのにしのわた殿（64ウ）」にやんことなき人のおはしておとゝにあはんとなんの給とこのそうのいふはたれにかあらむさるへき人こそおほえねもし大将殿のおはしたるにやとおもへと昨日の御ふみにさものたまはせさりし物をいかにもまかりてたつね侍らんとてたては又ある人のよしさもこそ侍れこの御とのあふらのあかゝりけるよ御かうしにあなもあらんはとて火すこしとりのけつれは君もちいさき木丁ひきよせてふし給ぬめり人々ちかくさふらひ給へなといひてこなたさまにくるまゝに人

もひさしうおはしまさぬこの御かたしもおほえなきにほひこそすれあなむつかかし（65オ）」しそくやさゝましいとくらしとてたちかへりつれはわかき人々たちさはくをおとなしき人々はいとゝさはかりものおそろしけにおほしめしたるになとかうものくるおしうおはすらんおにはくさうこそあなれ仏の御かほりにこそあらめといへは又かくれみのゝ中なこんやおはすらんとくちくたはふれにいひなせとひめ君はまことにものおそろしうてかほなからひきかつきてふし給へりめのとしそくさしてくれは丁のうちにいり給ぬれとしる人もなしおとゝにしおもてにゆきていつくにたつぬれといらふる人もなけれはかへりきてあやしきわさかなあり（65ウ）」つるそうもいにけり又人もなしそらことはよもせしものをつまとはひろうあきてそあるあやしきわさかな雪のみそいりて月はなけれともとはあかうてをかしきよのさまかなかせはをこるとも女もすきぬへかりけるよをいかなるけさう人のたつねきてをとなうたちかへりぬるならんくちおしきわさかなといひてみなわらふに丁のかたひらをかゝけていとひさしうをともしたまはてしそくの見えつれはこちまいるへきかとてなんまことはみなしみはてゝこよひはかへるましきをとくいらせ給ねといとなれかほに女君をひきいれたてまつり給へは人々あさましくあ（66オ）」きれて物もいはれす又ともかくもきこゆることもかひあるへくも見えねは身つからの心さかしらにやさいしやうとのゝおほさんすらんいとおしきわさかないとかく心あはたゝしく侍らすともいまはことさまにとはきこえ給はさめる物をとひとりこてはさいしやうの御ゆるしならてはいかてか内外し侍らんたゝ心やすく思給へとつれなうの給へはまたはきこえさせんかたなうてあさましううちとけ給へりつるものをなとなけくくのきてうちふしぬありしまろねの心つくしなりしをこよひは心やすくときちらしてふし給へるに女君はおちまさり（66ウ）」給てなきいり給へるさまのなのめならす心くるしきに覚しわつらひぬされとさのみはいかゝこよひはこけのさむしろにおほしやられぬにやとくあけぬる心ちしてとりのねのつらさもけさそ覚ししられける弁のめのとまいりてあけ侍りぬとはしらせ給はぬにやいとはしたなきほとになりぬとなけくこゑし侍なりときこゆれはまた夜はふかゝらん物をかつらきの神のさかしらにやとはの給へとからうしておき給てさうそくなとしさしぬきのこしなとひきゆい給もへたておほく心ほそくおほえ給へはいとかくさまあしき心のほと（67オ）」はいつならひけるにかと我なからもとかしきまておほさる

ときわひし我下ひもをむすふまはやかてたえぬる心ちこそすれあまりなる心いられもいかならんといまくしうてすゑはいひさし給へと弁はめてたしとそきゝける女君は月ころの御物思にいとゝしき御心まとひさへたへかたくさしそひてなきあかし給へるは涙のふちもけに身をはなかさぬわさにやといといみしう心くるしう見をきかたきをくるゝまつまのおほつかなさもわりなかるへく又さりとていつしかあらはれゐて人にもてあ（67ウ）」つかはれんもならはぬ御心ちには猶いかにそやつゝましうおほさるゝをたゝさいしやうにもしらせてわたしてんあけくれさしむかひていひなくさめまきらはさはをのつから心よりほかにわすれくさのおふるやうもありなんなとおほしてそのくるまこゝによせさせよ心ちのいみしくなやましけれはえいてぬなりとの給へは御かうし一まはかりあけて御くるまよせさす廿よ日の月なれは月もまたいとあかきに雪の光さへくまなくてひるのやうなるをおとこ君枕かみの木丁をしやりてみいたし給へれはいつれをむめとわくへうもあらす（68オ）」ふりかゝりたる枝さしともかのありしゆきすりのこすゑにいとようにたるもおもひのほかにめとまりしほかけ覚しいてられていみしうあはれなれは女君にことのねきゝしさまなとかたりきこえ給ておもはすにをかしかりし御ほかけはそれにやと思よそふるまてありかたくわかうものし給しかなほとく

思ひうつりぬへかりしかと思そめぬることかはらぬ心はせなれはかしこうおもひしのひてやみにしかあの木すゑともはそのよの心ちしてあはれなるを猶見たまへとせちにおこしきこえ給て（68ウ）」

ゆきすりの花のおりかとみるからに過にし春そいとゝ恋しきとの給にいとゝかことかましうなかしそへ給ものから此御ことにはみゝとまり給てさまくにはつかしうも有けるかなときゝ給にも

よそなからちりけん花にたくひなてなとゆきとまる枝となりけんなと心のうちにくちおしうおほさるいふともなきけはひのあい行そものことなるへきよろついとみをきかたけにみゆれと何のいかなるそとよ我こゝろなから思さまにてうちかたらひつゝおきふさんにも猶々物あはれなるへきそわれなからものくるを（69オ）」しきやされと御くるまもたけたれはいとかるらかにかきいたきてのせたてまつりたまへるを弁なをいとにはかにこそ侍へけれしはしはかやうにてもおはしましなん物をさいしやう殿もいかにあやしうおほさんときこえさすれとならぬあか月をきもくるしかるへけれはなりまつたたひとりはかりはとうのり給へといそかし給へはいと心あはたゝしき心ちしてとまる人人によろつはいひをきてひきつくろひてまいりぬとのにおはしてまつわれおり給て御木丁ともとりいてなとしてれいのかろらかにおろしたてまつり給へり弁もおりぬれはみち（69ウ）」すゑに此人ありつかす思らんつちねなとしてものせよとの給へはなにかたひとなおほしめしそいまよくありつかせ給ひなむといひてけにいとあるへかしきつほねしいてゝすへなととかくあつかひありく君は心やすう思さまにおほされてひたかくねをき給へるにとのゝ御かたよりたゝ今わたらせ給へとあれはさうそくなとし給に大弐のめのとまいりてよへもいつくにおはしますそととはせ給しにしり侍らぬよし申しゝかはをろかなりとさいなみ給しこそわりなく侍しか猶ありかせ給はん所しらせさせ給へと申せはわらひ給ていりといり（70オ）」ぬる人まとふみちなれはしらせきこえたりとてもたつね給はん事こそかたからめおなしくはすい身にてありき給へかしなといひたてふれ給御けはひのきかまほしうめてたけれは弁のめのとひとりゑみせられて木丁のほころひよりのそけはくれなゐの御そとものわたふくらかなるにうすいろのかたもんなるなとかさなりたるか色あひなへてならすきよらにみゆるによへの雪に所くかへりしほみたることさらにかくてこそきめとなまめかしくめてたしゑほうしのひたひもすこしあかりひんくきもしとけなけにてまたいとねふたけなるさまの（70ウ）」

（注1）「もてたかへて」と「はつかし」との間に、ほぼ一丁ぶんに相当する大きな脱落がある。ちなみに神宮文庫本ときわめて近い本文を有する龍谷大学蔵甲本でも同じ箇所が脱落している。この前後の本文は、内閣文庫本のそれに近いので、参考までに内閣文庫本の当該部分の翻刻を掲出しておく。神宮文庫本で脱落しているのは、左の※から※までである。

かの宮にもかゝる御せうそくなとをことのほかにもてたかへて※もまたたのもしき御ゆかりなとのなき御身なれはいかやうにかはもてなしきこえんなとおほしなからもさて我ほいのむけにたかひはてぬへきをいかさまにかはと思みたれ給つゝをくりむかふる年月のみすきつゝひめ君もやうくさかりになり玉ふまゝにみかと春宮ときこえさすともこの御ありさまになすらひなるへきやうも見え給はぬを大将とのほのめかし給うへ（底本ママ。「給て」か）ほとへぬるに見せたてまつり給へその御かたちはかりにやにつかはしからんと宰相の中将つねにきこえ給へとさすかにわさとおりたちたる御心さしとも見えすともすれはにしの山もとに心を

かけ給てよとゝもにあくかれ玉へるをきく〳〵猶いとあやしうつゝましき心ちしてすくし給にそのとしもすきて夏のはしめにもなりぬまたしきにさみたれかちにて物むつかしきひるつかた大将との春宮の御方にまいり給へれは御てならひなとせさせ給ていろいろのかみふみなととりちらされたるかやうの物はなとかはときく見せさせ給はぬいとうるさきこととにはめしまとはさせ給てとえんしきこえさせ玉へはなま※はつかしとおほしたるけしきにて（内閣文庫本・巻四・二八丁ウラ）

（注2）「火」の崩し字が間延びしたような形で「火」と見えなくもないが、「ゆへ」と読むほうが自然なようである。